



第8章 その他の諸活動

坂江, 渉
村井, 良介
佐々木, 和子
岩崎, 信彦

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 6(平成19年度事業報告書):91-93

(Issue Date)

2008-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002291>



第8章

その他の諸活動

播磨国風土記研究会の調査研究

地域連携センターと新宮町との共同研究事業『播磨新宮町史』史料編Ⅰの古代史料編纂に関わったメンバーが立ち上げた研究会の播磨国風土記研究会は、今年度も一定の研究調査活動をつづけた。とくに4月以降、平成19年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究」(課題番号19520571、研究代表者坂江渉)の助成をうけ、主に旧揖保郡を中心とする基礎的な研究調査をおこなった。

年度前半に何度かの事前研究会、および地元教育委員会文化財担当者との打合せをおこない、5月に風土記揖保郡条の「韓荷(からに)島」(現唐荷島)の上陸調査、7月に同条の「神嶋(かみしま)」(現上島)の上陸調査を実施した。また8月以降には、たつの市教育委員会の文化財担当職員から情報提供のあった山口県小郡文化資料館蔵の「秦益人刻書石」(仮称)の実見調査、専門家による立ち会い調査、および写真撮影、考古学的実測調査を数度にわたっておこなった。表面と裏面に刻まれる文字の釈文と、石そのものの性格の解明については、来年度以降の継続調査の結果に委ねたい。

(文責・坂江渉)

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会第91回例会における報告

下記の全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会第91回例会において、地域連携センター担当教員の坂江渉と、同研究員の村井良介が報告した。

日時 2007年9月14日 13:30～16:45
場所 和泉市コミュニティセンター1階中集室
テーマ 自治体と大学の連携

—自治体史編纂事業をととして—

報告者

①報告(自治体から)

テーマ:「合同調査と地域史研究」

報告者:森下徹氏

(和泉市教育委員会文化財振興課)

②報告(大学から)

テーマ:「地域連携事業と自治体史編纂」

報告者:坂江渉氏

村井良介氏

(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター)

本例会は、自治体史編纂事業をととして、自治体と大学の連携について考えることを目指すもので、それについて大学側の立場から報告の要請を受けた。坂江が自治体史編纂を中心として、地域連携センターの事業全般について説明し、村井が、特に新修神戸市史の編纂事業にかかわって、自治体史編纂事業の課題と可能性について論じた。

(文責・村井良介)

ホームカミングデーでの展示

今年も第2回ホームカミングデーが9月29日全学的規模で開かれた。人文学研究科では午後から瀧川記念学術交流会館を会場として実施された。1階のロビーにおいて地域連携センターの活動を紹介するパネル展示、およびこの間の連携成果物(小野市、丹波市、尼崎市、神戸市灘区、国交省神戸港湾事務所等)の展示、無料配付をおこなった。

(文責・坂江渉)

神戸大学地域連携活動発表会

神戸大学地域連携推進室主催の「神戸大学地域連携活動発表会」が、2007年12月17日(月)、瀧川記念学術交流会館大会議室で開かれた。まず学内公募による活動発表会、センター以外の部局による連携活動報告、および外部からの評価報告がおこなわれた。その後、本センターから坂江がパネリストとして加わり、人文学研究科地域連携センターの活動概要を報告し、さらに神戸大学の地域連携活動全体にわたるパネルディスカッションがおこなわれた。

(文責・坂江渉)

神戸新聞文化センター（KCC）・ 第19期さわやか大学講演

地域連携センター担当教員の坂江渉が、神戸新聞文化センターが主催する第19期さわやか大学（期間：2007年10月～2008年9月、毎週月曜）に招かれて、「風土記からみる古代の播磨一山（丘）の神話を中心に」と題する市民向け講演をおこなった（2007年11月19日（月）神戸市教育会館6階大ホール）。同年3月に刊行した『風土記からみる古代の播磨』（神戸新聞総合出版センター）の中身の紹介と宣伝を兼ねた企画として開かれた。講演では、まず同書が地域連携センターの連携事業（『播磨新宮町史』の編纂事業）の研究成果から生まれた書物であることを述べた。その上で『播磨国風土記』の山に関する神話のうち、とくに「天橋立」神話と「飯盛山」伝承に着目し、それぞれの神話の特徴や、そこから引き出せる儀礼や生活実態の中身などに言及した（約200名参加）。

（文責・坂江渉）

松本市文書館での講演会

松本市文書館は、『松本市史』編さん事業の中で収集された資料や、各旧役場文書など歴史資料として重要な公文書を収集、保存し、閲覧する施設として、1998年10月に開館した。

同館は、市史編さん事業の開始時から編纂後の史資料保存の検討をおこない、編さん事業終了後、条例制定館として設置された。開館にあたっては、新しい建物を建設せず、旧芝沢支所をほぼそのまま利用している。この過程については、同館館長である小松芳郎氏による『市史編纂から文書館へ』（2000年、岩田書院）に詳しい。

同館では、「文書に関する専門的な知識の普及及び啓発」のため、文書の保存と利用に関すること、歴史研究に関すること等について、年に2～3回講師を招いての講演会を開催している。今回、神戸大学から地域連携研究員が、第34回講演会講師として講演を行なった。

タイトルは「アーカイブが生まれる一災害と人が出会うとき」。神戸大学人文学研究科地域連携センター事業の一つである、阪神・淡路大震災後の震災資料の保存活動を取り上げたものである。

阪神・淡路大震災まで、災害の資料といえば、震源地の特定や規模、地震のメカニズムを解き明かす自然科学系のものが中心に考えられていた。今回はそれに加え、その災害に出会ったときの人々の動きや救援の様子、社会はどのような影響を受けたかなど、人々の暮らしの視点に入れた人文・社会科学系の要素が加わった。最初に記録保存に立ち上がったのが、ボランティア自らのやったことを残そうとするグループ、「震災・活動記録室」であったことは象徴的である。さらに、そこに神戸大学図書館や兵庫県が、避難所のチラシやピラまで含めた網羅的収集が加わった。

震災に関する記録やそこからの復旧・復興の記録は、いつのまにか「震災資料」と呼ばれるようになった。記録が、保存すべき記録資料すなわちアーカイブになった。「震災資料」を収集・保存する機関は、人と防災未来センター資料室、神戸大学震災文庫など公的機関とともに、震災・まちのアーカイブや人・街・ながた震災資料室などのボランティアが加わり、震災の文書館、アーカイブが誕生した。これらをどう育てていくか、被災地である阪神・淡路地域に求められている。

（文責・佐々木和子）

学術振興会人文社会科学振興プロジェクト「被災地における共生社会の構築」

学術振興会人文社会科学振興プロジェクト「被災地における共生社会の構築」の代表者として、①『災害と共に生きる文化と教育』を編纂・刊行し、また②〈「市民連携大学ひょうご」の構想を推進する会（準備会）〉の設立に参画した。さらに③報告書『忘れないで！阪神淡路大震災で重傷、障害を負った人のこと』を刊行し、「災害弔慰金支給等に関する法律」「被災者生活再建支援法」の改善を求めて、関係機関に送付した。

（文責・岩崎信彦）